

# 第二次国共合作時期における 宋慶齡の政治活動について

張 義 漁

蔡 建国・桜井英規 訳

## 1. 問題の提起

宋慶齡（1893-1981）に関する研究では、辛亥革命前後の孫文と共にした革命活動及び1949年以後の児童教育、世界和平への貢献については近年多大な成果をあげているが、孫文逝去後実現された第二次国共合作における彼女の独自の政治活動については見逃されている。第二次国共合作時期において国民党の代表者である孫文未亡人の宋慶齡は、どのような役割を果たしたのか、また、その時期において彼女の政治活動の重点はどこに向けられていたのか、これらの問題は宋慶齡の第二次国共合作時期の政治思想に直接関わるものである。同時に一方、こうした問題の解決には彼女の政治活動および思想の全体像に対する理解が不可欠である。拙文はこの問題をめぐってその解明を試みたいと思う。

## 2. 国共合作政策に対する宋慶齡の対応

第一次国共合作の実現は近代中国の政党政治において重要な出来事であり、国共合作の役割は中国革命史における転換期とも言われていることは、まさしく、現在に至るまで国共両党に一致した認識であり、そのことは周知のとおりである。国民党と共産党の合作が成功したその時は、

国民党の創始者であり、近代中国の初代指導者でもあった孫文の生命の末期であった。1925年、孫文の逝去によって、国民党の新たな指導部には国共分裂の動きが生じた。孫文の未亡人宋慶齡は従来の孫文路線を継続し、国共合作を維持することを主張したが、それは偶然なことではなく、彼女が一定の思想と認識をもっていたからである。

宋慶齡は若いころから孫文の革命活動に参加したが、その失敗にも少なからず遭遇し、また、西洋資本主義国家から支援と援助を得たいという期待も常に裏切られた。このような困難な状態にあって、1917年のロシア革命、1919年の五四運動、1921年の中国共産党の成立など国家の運命に関わる重大な意義を持つ一連の出来事は、孫、宋に影響を与えた。その結果、かれらは自分たちの革命綱領を総括し、調整、修正などを行ったのである。レーニンは孫文の民主革命に対し「孫文の綱領のいたるところに戦闘的な真の民主主義が浸透している」<sup>1)</sup>と高評した。ソビエト連邦が誕生した直後に『和平宣言』が発表され、その「宣言」は帝政ロシアと中華民国臨時政府の間に締結された全ての「不平等条約」、「密約」は直ちに廃絶すると述べていた。1919年7月、ソビエト連邦外交人民委員会は、帝政ロシアがかつて中国から奪い取った一切の中国の権益を放棄するという宣言を、初めて世界に向けて発表した。また、1922年6月英国が陳炯明の謀反を支援したことにより孫文の革命及びかれ自身が大きな打撃を受けたとき、コミンテルンの派遣したマーリンらは孫文のもとを訪れ、ソ連政府及びコミンテルンの中国革命に対する支持を伝えた。このことは、孫文に革命を継続させた。その間、孫、宋は中国共産党の李大釗らと幾度も会談し、李大釗は中国共産党と国民党の合作についての意見を述べた。孫、宋はレーニン及びソ連と西洋諸国とを比べた結果、帝国主義、封建主義は中国人民の敵であるということを確認に認識するとともに、レーニン及びソビエト政府は中国の真の友人であるということも認めた。また、かれらは、中国の革命が西側諸国にとって「聞きたくないこと」<sup>2)</sup>なのであり、これらの国が「我々に反対して我党の消滅を図る」<sup>3)</sup>ものを援助していることを認識して、これらの強大且つ凶悪な敵に勝とうとすれば、中共と合作しなければならないと判断した。孫文は、民国成立後、官僚、政客、軍閥等の流入と一部党員の墮落によって、国民党はすでにその革命性を失った、と指摘し、

「国民党はまさに死につつあり、そのため党を生返らせる新たな血が必要であ」<sup>4)</sup>って、共産党員を国民党に参加させることにより新しい力を吸収しなければならないと決意した。宋慶齡は孫文のこの主張に同意し、また、1937年の時点で孫文の意見は依然として「なんと真実で」<sup>5)</sup>であろうかと思ひ、そしてロシアのような路を歩むには、労農の利益を代表している中国共産党との合作が必要であることを理解した。これは孫文の要求であっただけでなく、後の宋慶齡の革命的な生涯に一つの重要な思想的基盤となったのである。

こうした思想的基盤によって、宋は孫文の「連ソ・容共・労農扶助」という三大政策を擁護した。レーニンを「革命中の聖人」<sup>6)</sup>と見なし、またレーニン及びコミンテルンの代表であるマーリンらを尊敬し、信頼した宋慶齡は、孫文の国共合作をめぐる工作を手伝った。こうして、1924年1月、コミンテルンと中国共産党の援助の下に、中国国民党第一次代表大会が行われ、中共の反帝反封建の主張に同意し、新三民主義を採択した。また、大会は共産党員の国民党への参加を認め、李大釗ら十数名の中共党員が参加した国民党中央執行委員会を選出し、国共合作としての革命統一戦線を樹立した。

第一次国共合作の実現によって、北伐戦争は勝利を収め、労農運動は発展した。ただ、孫文逝去2年後の1927年に発生した国共分裂に宋慶齡が大きな衝撃を受けたことは間違いない。国民党と共産党の厳しい対立の狭間にあって、宋慶齡は、国共合作は中国人民が革命闘争に勝利し得る唯一の道であると認識し、その必要性をさらに明確に示している。従って、第一次国共分裂に対し、宋慶齡が新たな国共合作の道を模索したことは周知の通りである。

### 3. 第二次国共合作をめぐる政治活動とその認識

第一次国共合作決裂以後、宋慶齡は孫文の三大政策の実現を主張し、国共両党合作の必要性を改めて強調した。1927年からの4年間、彼女は欧州で各国の革命経験を研究する一方、中国の現状を踏まえてその前途を考えていた。31年帰国後、国民党のやり方とその腐敗を痛感し、はげしい憤りをもって、「労農政策を基礎とする党こそ、社会主義の基盤を

作り、軍閥の勢力を粉砕し、帝国主義の首かせをふりはらうことができる」<sup>7)</sup>と指摘し、さらに、中国革命は「労働者階級の指導の下で」<sup>8)</sup>行わなければならないと明言した。宋慶齡は、中国共産党の指導の下で、国共合作を実現し、統一戦線を樹立することが中国革命の成功に直接に繋がっていると確信していたと思う。

従って、宋慶齡は中国共産党の抗日民族統一戦線の主張を尊重した。1935年8月、中共は「八一宣言」を発表し、瓦窯堡で開かれた中共中央政治局会議の後に、毛沢東が「日本帝国主義に反対する策略を論ず」<sup>9)</sup>という講演を行った。これらの宣言と報告では、中国革命において広汎な統一戦線を樹立することの必要性及び可能性が指摘され、その内容は宋慶齡の従来主張と一致した。その後中共は、馮雪峰、潘漢年を派遣し、瓦窯堡会議と毛沢東講演の内容について上海の宋慶齡に伝えた。また、1936年毛沢東は宋慶齡宛に書簡を送り、国民党中央委員の資格で具体的な活動を行うよう要請した。

国共合作が必要であるという信念を堅持していた宋慶齡はその後、第二次国共合作の実現に尽力した。

九・一八事変（満洲事変）及び一・二八事変（上海事変）に続いて中国の全域に及んだ抗日戦争が勃発した。その厳しい情勢の中で、国共両党の内戦は激しく、国民党は紅軍に対し包囲討伐を続ける一方、国共合作の道を画策し始めた。こうした国民党の対共産党政策に変化が現れた状況の中で、アメリカと親密な関係を持ち、国民党指導部中の親英米派の大物で、宋慶齡の弟である宋子文は、国共合作を実現して日本の侵略に抵抗するという策略を主張した。彼は宋慶齡に、国共両党会談を要請する国民党側の書簡を中国共産党指導者に転送するよう依頼した。宋慶齡はこの要請を快諾した。1936年1月、宋慶齡はこの書簡を、牧師で中国共産党の秘密工作担当者である董健吾を通じ、延安の毛沢東、周恩来、張聞天らに送った。董は中共の返書を持ち帰り、宋慶齡に報告した。その返書には、内戦を停止し、一致抗日を実現し、国防政府及び抗日連軍を組織し、政治犯を釈放して人民の政治的自由を許可し、内政及び経済について必要な改革を行うなど5項目の条件が提案されていた。宋慶齡はこれらの条件が明言されている書簡を、宋子文を通じ、国民党の中央指導部に転送した。これを契機に、中共は潘漢年を代表とし、国民党は

陳立夫、張冲らを代表として直接の話し合いが行われることとなり、その後周恩来と蔣介石の会談にまで進んだ。これらの会談にあたって、宋慶齡は毛沢東ら中共指導者の求めに応じ、潘漢年の手伝いをした。10年ほど中断していた国共の関係が両党指導者の直接の話し合いによって改めて再開されたという点で、この会談の歴史的意義の重要さはいうまでもない。というのは、今回の会談が行われる前に、モスクワで中共の代表潘漢年と国民党政府の駐ソ大使館武官鄧文儀との会談があったが、結局この会談では進展は得られなかった。それ故に、今回の会談は、国共双方の観点、態度及び要求などが直接出され、お互いの立場を理解する機会となった。

また、宋慶齡が国民党の会議で抗日民族統一戦線の樹立、国共合作の実現についてその重要性を積極的に宣伝したことによって、会議に充満していた反共と独裁の雰囲気は打ち破られた。即ち、1937年2月に国民党第五期中央委員会第三次全体会議が開かれたが、宋慶齡は、蔣介石、汪精衛らの支配している国民党及び政府との政治関係を断つという従来の方針を変更し、会議に出席した。何香凝、馮玉祥、李烈鈞ら13人と共に「孫中山先生が自ら定めた連ソ、容共、労農三大政策を回復する案」<sup>10)</sup>を提出した。と同時に、宋慶齡は「孫中山の遺言を実行する」<sup>11)</sup>という演説を行ない、その中で、国民党に内戦の停止、共産党と連合して抗日を行うことを呼びかけ、先に共産党を討伐し、後に抗日するとの主張を強く非難し、さらに、この10年間の苦痛な教訓に言及した。宋慶齡は次のように述べた。「救国するには、まず内戦の停止が必須である。そして中国共産党を含む全ての力を動員し、中国国家の保全を防衛すべき」<sup>12)</sup>であると主張した。また宋は、「この半年来中共は何度も国民党中央委員会に電報を送り、国共が合作して一致抗日することを提案した。……、われわれはこれを機に、総理の三大政策を回復し、党国滅亡の危機を救うと同時に革命の使命を完成すべきである」<sup>13)</sup>と提唱した。宋慶齡らの提案は受け入れられなかったとはいえ、国民党を公然と批判し、孫文の三大政策の実現、共産党との連合を主張したことは、この10年間には全くないことであり、非常に大きな影響をもたらした。また、こうした行動は、国民党の政策の転換を力強く促進したともいえる。この会議の後、国民党側は、国共合作に対する幾つかの問題をまだ残してはいた

が、蔣介石の談話を発表して、言論の開放、人材の集中、政治犯の赦免など、中共が提出した要求に部分的に応じた。こうした結果からみれば、この会議では、第二次国共合作の抗日民族統一戦線が初歩的な形成をみたのであり、その中に示された宋慶齡の役割はいうまでもない。

宋慶齡は第二次国共合作実現のための活動において、労農大衆を動員し、これに依拠しただけでなく、その特殊な社会的地位により、国共合作と抗日を主張している国民党内の全ての人々と団結した。1932年には、宋と蔡元培らの関係は一層緊密になり、中国民権保障同盟を結成した。蔡元培は辛亥革命時代の元老であり、内外に著名な教育者であり、近代中国の思想家である。宋慶齡と蔡元培の連合行動が中国に巨大な影響を与えたことは周知の通りである。国民党内の多数の関係者は宋慶齡の主張の正しさを痛感し、啓発を受けた。李烈鈞は上記の国民党会議で宋慶齡の講演を聴いて、「我々は中山先生の道を歩む。いかなる危険があろうとも恐れない」と述べた<sup>14)</sup>。また、馮玉祥は「救国大計を促進する案」を発表し、蔣介石を直接に批判すると同時に、蔣に「議したことは必ず決め、決めたことは必ず行う精神を励行<sup>15)</sup>し、共産党との共同抗日を実現することを求めた。このように幾多の曲折を経て、第二次国共合作を実現することができたのである。1937年9月22日、国民党の中央通信社は、中共中央が7月15日に送付した「中国共産党国共合作宣言」を公表した。この宣言には、両党及び全国民衆の団結の根本的な方針が定められていた。翌日、蔣介石はこれに対する談話を発表した。その談話において蔣は依然として中国共産党が提出した綱領に、明確に添えておらず、また、これまでの誤りも認めてはいないが、中共の合法的な地位を初めて承認し、さらに団結救国の必要性も明言した。こうして国民党は中共の宣言と蔣介石の談話などを発表することにより、国共合作の基礎としての抗日民族統一戦線の樹立を宣言した。毛沢東は「両党の連合救国の偉大な事業に対し、必要な基礎をつくった<sup>16)</sup>と評価した。また、第二次国共合作の実現に対し、宋慶齡は、「国共合作に対する感言」及び「二つの『十月』」など、非常に興奮した心情を表わした感想文を発表した。そして、これが国家の安否に関わる大事であると察知した宋は、「私は、この数日間、中国共産党の共に国難に赴く宣言及び中国国民党指導者蔣委員長の団結して外国の侮辱に抵抗する談話を読み、

非常に興奮し、非常に感動した。……、涙が流れるほど感動した<sup>17)</sup>と述べた。いうまでもなく、第二次国共合作の実現には様々な要因があったが、宋慶齡と中国共産党との共同歩調、彼女の社会的地位と民衆の間における高い威信などが果たした大きな役割も不可欠であったことは明らかである。

無論、第二次国共合作の実現以降も国共両党の間には再三にわたり決裂の危機があり、紛争は依然として残されていたが、宋慶齡が今回の合作を高く評価すると同時に、それを強固なものにするために重要な役割を果たしたことは知られる通りである。

#### 4. 第三次国共合作実現のための宋慶齡の動向

中華人民共和国が成立した後、宋慶齡は、祖国統一を目指すのであれば第三次国共合作を実現しなければならぬと明確に認識し、また、それが孫文の新三民主義を実現するための必要条件に直接関連していることまで悟っていた。

今世紀50年代中期、緊張していた国際情勢が緩和の方向に向かうなかで、周恩来は中国共産党を代表して「中国人民が台湾を解放できる方式には二つの可能性がある。即ち、戦争の方式と平和の方式である」と指摘した。また、『人民日報』はこれに対し、平和の方式で台湾を解放するとすれば、海峡兩岸の国共両党合作の途を実現することが必要である、という社説を発表した。台湾問題の解決に向かって、また、祖国の統一を実現することを目指す第三次国共合作方策に対し、宋慶齡は中共中央の主張に全面的に同意し、これを支持した。

1955年8月、宋慶齡は、中国人民政治協商会議全国委員会が主催した「廖仲愷逝去三十周年記念大会」において、国共合作に献身した廖仲愷の役割を評価し、第一次国共合作の実現を推進しようとした廖仲愷は「中山先生の戦友であり」、「彼は誠心誠意、昼夜を問わず、国民党改組後の連ソ、容共、労農扶助の三大政策を実行し、さらに国共両党合作を基礎として中国国民党第一次全国代表大会が定めた全ての政綱を全力で擁護した<sup>18)</sup>と指摘した。宋慶齡はまた、第一次国共合作の実行は孫文の正確且つ重要な決定であり、それは中国革命の事業を促進するもの

であって、廖仲愷は孫文に協力してこの国共合作を実現させた、と指摘した<sup>19)</sup>。さらに彼女は、廖仲愷が黄埔軍校の国民党代表であること、軍校の政治と教育工作は周恩来と鄧演達らにより大きな成果をあげたことを述べていた<sup>20)</sup>。

こうした一連の宋慶齡の活動は、当時、次のような重要な意義を持っていたといえることができる。

(1) 民心に順応し、海峡兩岸民衆の支持を得られた。周知の通り、台湾及び海外にいる一部の中国人は反共の立場をとっているが、しかし、多くの人は愛国心も持っているので、国共の合作、祖国の統一が実現されることに強い願望を表明していた。「同郷会」のような組織が相次いで出現したことはその証左である。その中で宋慶齡の講話は、広範な反響を呼んでいることは周知の通りである。

(2) 台湾問題の解決に向かって、有利な国際協力の環境を作り出した。1955年4月バンドン会議で朝鮮とベトナムの問題が解決された後、世界各国は台湾海峡の情勢及び中米関係に注目していた。周恩来はバンドン会議で講演を行った。周が表明した中国政府の海峡兩岸情勢に対する原則的立場は、会議に参加した各国の支持及び称賛を得た。これに関し、国際交流の場において多くの友人の間に高い威信をもつ宋慶齡の活動は、中国政府が有利な国際環境をつくるうえで有力な支援となり、中国共産党と政府の兩岸統一及び第三次国共合作の政策が誠心誠意のものであることを世界の人々に一層認識させた。

(3) 中国の民衆に国共合作が必要であるという認識を高めた。廖仲愷は国民党の元老であり、長年にわたって孫文に随い、連ソ、容共、労農扶助の三大政策を徹底的に実行したことについて、宋慶齡は演説の中で十分に述べた。これは、中共が全面的に勝利したにも拘らず、過去の古い友人を忘れておらず、また、国共合作を依然として主張しているという中共の誠意を民衆に示すものであった。

1956年以後、中国は台湾問題の解決について第三次国共合作の実現を図るという目標を従来よりも一層明確かつ具体的にする一方、実際的な行動も示した。即ち、毛沢東は、台湾側の人々にもし愛国的立場で、大陸を訪問したい気持ちがあれば、個人或いは団体を問わず、いずれも歓迎する、と述べた。また、周恩来も、「国民党と共産党は合作したこと

が二回ある。第一次合作によって国民革命軍は北伐に成功し、第二次合作によって抗日戦争に勝利できたことはすべて事実である。なぜ第三次合作ができないのか<sup>21)</sup>と指摘した。1962年、64年と73年の3回、中共は章士釗に香港で台湾側と接触させ、海外にいる元国民党の政、軍人員の祖国大陸への定住、親族訪問などを呼びかけた。

宋慶齡もこの動きの中で一連の文章を発表し、演説を行った。例えば、1956年4月の「偉大なレーニンを記念する」、11月の「孫中山——中国人民の偉大な革命の息子」、「十月社会主義革命と中国革命の歴史的関係」及び「孫中山を回想する」、1961年9月の「『辛亥革命回憶録』序言」、1966年の「孫中山——確固として揺るがない、不撓不屈の革命家」などである。これらの文章と講話において孫文の三大政策の由来、国共合作の役割と業績を全面的に論述し、さらに自らの体験を通して得た、中共との合作の必要性に言及した。宋は次のように指摘した。「孫中山は中華民族と中国人民のために四十年間政治闘争を行い、晩年にその最高峰に達した。この発展の頂点は彼が中共との合作を決め、ともに中国革命を行ったことである<sup>22)</sup>。また、宋は、国共合作が中国革命に有利なことであると明確に認識していたと同時に、中華人民共和国においては中国共産党と毛沢東の指導の下で、「孫文の一生奮闘した目標はすでに実現され、しかも、かれの目標をはるかに超えてしまった<sup>23)</sup>と感じていた。宋慶齡の観点では孫文の三民主義と中国共産党の最低綱領は基本的に同様であったのである。

また、宋慶齡はその晩年、1978年12月の中共十一期三中全会以後、さらに第三次国共合作を実現させ、祖国を統一する思想を提唱した。79年3月に開かれた中国人民保護児童全国委員会全体大会において、また9月に発表した「人民の意志は征服されることはない<sup>24)</sup>という文章の中でも、「私は、台湾の骨肉同胞のことを忘れていない。三十年を経た今、台湾が祖国に戻り、国家統一を実現するという事業はまだ完成していない。中国人で責任を感じない者がいようか」と述べた。また、海峡兩岸において巨大な影響力を持っている蔡元培を記念して1980年3月に開かれた大会で演説した。そして、蔡元培は曾て国共合作に賛同し、全面抗日を主張したという功績を指摘した。彼女が蔡元培の精神を強調した目的は、それが第三次国共合作の実現にとって積極的な意義があると考え

たからである。

## 5. むすびに

宋慶齡の生涯をみると、一貫して国共合作の実現を重視してきた思想は、彼女が長年にわたって中国革命と建設事業に献身してきた経験の結晶であり、また、彼女の一生を貫いた基本的な思想のひとつでもある。以上、現代中国の政治と社会を背景に、第一次国共合作期から第三次国共合作を主張するに至るまで、とくに、第二次国共合作を実現させた彼女の政治活動を分析し、それを踏まえ、国母と呼ばれている宋慶齡の政治理念を究明した。また、この延長線上に、国共両党の厳しい対立の狭間にあって、宋慶齡の思想と行動及びその意義は激動の20世紀における中国政治の特質を反映しているものともいえる。

## 註

- 1) レーニン「中国的民主主義和民粹主義」、『列寧選集』（人民出版社，1992）第2巻，424頁。
- 2) 鄧沢如「中国国民党二十年史蹟」，盛永華『宋慶齡論』（広東人民出版社，1993），184頁。
- 4) 5) 宋慶齡「儒教与現代中国」、『宋慶齡選集』（人民出版社，1992）上巻，178頁。
- 6) 宋慶齡「紀念偉大的列寧」，前掲『宋慶齡選集』下巻，191頁。
- 7) 宋慶齡「国民党已不再是一個政治力量」，前掲『宋慶齡選集』上巻，85頁。
- 8) 宋慶齡「中国的自由与反戰闘争」，同上，134頁。
- 9) 毛沢東「論反对日本帝国主義的策略」、『毛沢東選集』（人民出版社，1964年版）128頁。
- 10) 「恢復中山先生手訂聯俄，聯共，扶助農工三大政策案」，前掲『宋慶齡選集』上巻，163頁。
- 11) 宋慶齡「実行孫中山の遺囑」，同上，165頁。
- 12) 同上，167頁。
- 13) 前掲「恢復中山先生手訂聯俄，聯共，扶助農工三大政策案」，163頁。
- 14) 15) 唐培吉・王閔興・鄒榮庚共著『兩次国共合作史稿』（浙江人民出版社，1989），233頁。

- 16) 毛沢東「国共合作成立后的迫切任務」，前掲『毛沢東選集』335頁。
- 17) 宋慶齡「国共合作之感言」，前掲『宋慶齡選集』上巻，205頁。
- 18) 宋慶齡「在政協全国委員会紀念廖仲愷先生逝世三十周年大会上的講話」，前掲『宋慶齡選集』下巻，126頁。
- 19) 同上，127頁参照。
- 20) 同上。
- 21) 北京『華声報』1984年5月17日。
- 22) 宋慶齡「孫中山和他同中国共產党的合作」，前掲『宋慶齡選集』下巻，384頁。
- 23) 宋慶齡「孫中山——堅定不移，百折不撓的革命家」，同上，499頁。
- 24) 宋慶齡「人民的意志是不可戰勝的」，同上，591頁。